

## ■はじめに

「年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず」と申します。今年も人事異動で多くの方々が変わられ、一条高校に校長として藤原和博先生をお迎えしました。藤原先生は東京都の杉並区立和田中学校で校長を務められ、「よのなか科」の授業や、奈良市内全中学校区で実施している学校支援地域本部(地域教育協議会)事業の先駆けとなる「和田中地域本部」などに取り組みられた大きな実績があります。一条高校の改革を進めるにあたっては、大学入試改革に対応するという目の前の課題もありますが、私たちの目の前にいる子どもたちが向かう 21 世紀には、一体どのような社会がおとずれ、その社会を力強く歩むために、今、子どもたちにどんな力を身につけていかなければならないのかということを考え、議論していく必要があります。小中学校も含めて見通しを持っていただきたいと思います。



## ■リーダーに必要な 3 つの資質

ここにお集まりの皆さんは、それぞれの学校のトップであり、組織のリーダーです。そのリーダーに必要な資質について話します。経済財政政策担当大臣などを務められ、慶応大学教授であった竹中平蔵先生は、梅原猛さんの著書『将たる所以』(光文社)を読まれ、「その本を私なりに解釈すると、リーダーには日本かアメリカかに関係なく、特別な資質が 3 つ必要だ」と言っておられます。



1 つ目は、自分の頭で世界や将来を見通す洞察力を持っている事です。例えば、アメリカはこれからどうなるか、ヨーロッパの財政危機はどうなるか、ライバル企業はどう動くかといったテーマを頭の中で整理して洞察力を持たないと、「今どうすべきか」という判断を下すことができません。

2 つ目は、自分の考えをステークホルダー(利害関係者)に語って、説得する力です。経営者であれば、部下や株主や債権者や銀行

を説得する必要があります。自分の言葉でしっかりと話さなければなりません。今で言う、説明責任です。リーダーには説得力がなければいけません。

3 つ目が、組織を動かす力です。人はそれぞれ色々な思いを持って生活や仕事をしています。そうした一人一人に対して、上手くインセンティブを与えて、皆をまとめる力が求め

られます。

竹中先生も梅原先生も触れているのは歴史上の世界や日本のリーダーについてですが、私はこれを教員の世界に置き換えて、更に読み替えてみました。1つ目の「洞察力」についてですが、我々がアメリカやヨーロッパの政治経済まで洞察することはなかなか困難です。しかし、将来、日本の労働人口の49%にあたる職業について人工知能やロボット等で代替可能になると言われています。また、チェスや将棋では人間が敗れたが、囲碁はまだ10年かかるだろうと言われていたにも関わらず、人工知能が囲碁でプロ棋士に勝つという事が現実に起こっています。この先、何が起こるか予測が難しい中でも、子どもたちにどのような力をつけていかなければならないのだろうかということは、リーダーとしてしっかり頭で考えなくてはならないと思っています。

2つ目の「説得する力」については、学校には先生方だけでなく保護者や地域の方も来られます。その方々に話をする時は共感を得て納得してもらうことが大切です。そうでなければ、学校としてやるべきことが停滞してしまいます。いわゆる「説明責任」や「情報公開」に関してしっかり責任を果たして、意識を高め、周りの人達をしっかり説得する力を持つ必要があります。時には冷静に、時には熱く語れるリーダーになってほしいと思います。

3つ目の「組織を動かす力」については、現在、学校組織は中間年齢層がおらず若い新人教員と年配のいわゆるベテラン教員が多く、我々が育てられた頃のように先輩の後をついていけば上手く育っていた時代ではありません。その組織を円滑にまとめて動かしていくためには、一人一人に上手くインセンティブを与えなくてはなりません。例えば、小さいお子さんを育てながら精一杯になっている先生に、「早く帰りや」と言葉を掛けることで業務時間中に仕事を終えようとする力を発揮するかもしれません。また、教科の授業を一生懸命頑張りたいけれど悩みも持っている先生に、「こんな研修あるけど参加してみたら」と相談にのることで、教科の専門性を高めようとさらに努力するかもしれません。個を知りながら、教員にやる気を起こさせる力が大事です。

## ■おわりに

それぞれの立場で物事を見通したり予測したりするときに、「学校って何をするとところなのだろう。教育って何のために行われるのだろう。」ということに照らし合わせて考えてほしいと思います。どんな社会がおとずれようとも、その社会の中でたくましく生き抜く子どもを育てたい。その実現のためにリーダーシップを発揮するのは校長先生方だと思っています。どうぞ宜しくお願いします。